

# 第 155 回東邦医学会例会 予稿

2 月 12 日(水)

## A. 大学院生研究発表 1 (No. 1)

### 1. 薬物乱用頭痛におけるストレス対処行動に関する検討

小山 明子 (心身医学)

薬物乱用頭痛 (Medication Overused Headache : MOH) は日常生活への高い支障度が知られているが、その病態は不明な部分が多く残されている。今回、MOH のストレス対処行動にはどのような傾向があるのかを、SCI, EAS などを用いて調べ、検討した。MOH の方が EAS において円熟性が有意に低い傾向がみられた。

## B. プロジェクト研究報告 1 (No.2-4)

### 2. ステロイド性骨粗鬆症における新規 Wnt シグナル制御因子の関与

川添 麻衣 (大森膠原)

我々はこれまでに、ステロイド治療開始後早期の血清 Wnt3a は低下、血清 sclerostin, Dkk-1 は増加することから、治療早期における骨形成低下への Wnt シグナルの関与を報告した。本研究では未治療膠原病患者を対象に、Wnt シグナルリガンド阻害因子 (sFRP1, Wif1) を新たに測定した。sFRP1/Wnt3a, Wif1/Wnt3a は低下したことから、早期以降も Wnt シグナルの関与が示唆された。

### 3. 当科におけるびまん性肺疾患に対する胸腔鏡下外科的肺生検の安全性と有効性

仲村 泰彦 (大森呼内)

過去 12 年間に VATS を施行されたびまん性肺疾患 130 例を対象に、VATS の安全性と有効性を後方視的に検討した。MDD により、IPF / NSIP / unclassifiable IIP / PPFE / CVD-IP / CHP / 抗 ARS 抗体症候群 / その他 = 17 / 15 / 33 / 5 / 25 / 8 / 13 / 27 例と診断。IPF の割合は、probable UIP で 10 / 19 例 (52.6%) と高値であった。合併症は術後肺瘻 8 例 (6.2%)、急性増悪 1 例 (0.8%) であった。

### 4. 肺胞上皮細胞障害におけるバイオマーカーの確立

黒澤 武介 (大森呼内)

II 型肺胞上皮細胞はその障害が間質性肺炎など難治性肺疾患との深い関与が示唆されているものの、その起源は不明瞭である。間質性肺炎は急性増悪による致死率が高く、広範な肺胞上皮細胞障害を認めるが、病態を把握するバイオマーカーが存在せず診断や治療に苦慮している。今回遺伝子改変マウスを用い広範で劇的な II 型肺胞上皮細胞障害を誘導した結果を、ヒト間質性肺炎患者での解析と比較したため報告する。

## E. 研修医発表 1 (No.7-11)

### 7. 両側腎細胞癌疑いの腫瘍に対して生検後、両側腎転移と診断された 1 例

鈴木 伝 (大森研修医)

症例は 69 歳女性。両側腎腫瘍疑いにて当院を紹介受診し、確定診断のために腎生検を施行したところ、組織診の結果は肝細胞癌様の腺癌であった。20 年以上前に肝腫瘍に対して肝左葉切除術を施行された経緯があり、肝細胞癌の両側腎転移の診断で分子標的薬治療が開始となった。現在治療開始後 1 年であるが、画像上は増悪を認めていない。本症例で生検を行ったことが結果的に治療介入につながったため、報告する。

### 8. 急性膵炎後の巨大な膵周囲液体貯留に対して内視鏡的治療を行った 1 例

林 幹士 (大森研修医)

アルコール多飲歴のある患者。上腹部痛と背部痛を主訴に来院された。精査の結果、膵炎後の被包化膵壊死の診断に至った。EUS-CD 下施行しエコーにて嚢胞を確認した上で穿刺、排液、ステント留置を行った。ステント留置後からの改善を認めたが、新たに右季肋部通と AMY の上昇も認めた。主膵管の破綻も認めたため、追加で膵管ステント留置も行った。

9. **遺伝性パラガングリオーマにカテコラミン心筋症を合併した若年女性の症例**  
中村 飛鳥 (大橋研修医)  
通学中に動悸出現し救急搬送された17歳女性。来院時EF15%で心原性ショックを認めた。CAGは冠動脈正常で、心筋生検では劇症型心筋炎は否定的であった。第10病日EF65%まで回復し、心筋シンチ検査などの所見から、心室中部たこつぼ型心筋症と診断。たこつぼ型心筋症であり褐色細胞腫併存否定のためCT検査施行した所、右後腹膜腫瘍を認めた。ホルモン検査、画像検査からパラガングリオーマの診断となり、腹腔鏡下腫瘍摘出術を施行され退院。

10. **分娩誘発中にペニシリンアレルギーが生じた一例**  
三浦 雅史 (大森研修医)  
39週4日の初産婦に分娩誘発施行し感染症予防にアモキシシリンの内服を開始後、発熱、発疹を認めた。ペニシリンアレルギーと診断し、ステロイドを内服し改善を認めた。分娩後の抗菌薬はホスホマイシンNa使用し発疹は認めなかった。ペニシリンアレルギーが生じた際β-ラクタム系抗菌薬の使用は推奨されない。しかし化学構造式の側鎖類似性に注目するとβ-ラクタム系抗菌薬の中でもペニシリンと交差性の少ない抗菌薬が確認されている。

11. **心筋梗塞、脳梗塞の経過中、肺腫瘍を指摘され突然の心停止をきたした一例**  
平野 幸世 (大森研修医)  
心筋梗塞、脳梗塞の治療中、stageIVの肺腫瘍を指摘された。また、抗凝固薬・抗血小板薬を内服する中で消化管出血による大量出血もきたしそのコントロールに難渋した。出血コントロールがついた矢先に突然の心停止をきたした。その後病理解剖を行い、肺腫瘍血栓性微小血管症が原因であると分かった。その他病理解剖により多臓器に渡る様々な病理所見を認め、病体を検討した。

2月13日(木)

F. 研修医発表2 (No.12-15)

12. **手術適応に難渋した降下性壊死性縦隔炎の一例**  
阿部 光義 (大森研修医)  
症例は48歳男性。2週間前に他院で入院リハビリ中に咽頭痛を認め急性扁桃腺炎と診断され、抗菌薬が投与されていた。呼吸困難が増悪したため、胸部CTを施行し、扁桃腺膿瘍及び降下性縦隔炎と診断され手術目的で当院に転院搬送された。致死的病態である本症例は胸部症状が出現後も縦隔ドレナージが遅延した症例である。手術に到るまでの経過が長かったが、集学的治療にて救命できた症例を経験したので報告する。

13. **ムカデ咬傷後に頸部壊死性筋膜炎を生じた一例**  
演者名：小柴光央 (大森研修医)  
ムカデ咬傷の多くは軽症で、重度の場合は急性期にアナフィラキシーを生じるが稀である。治療は創部処置と対症療法が主である。今回、ムカデ咬傷後に頸部壊死性筋膜炎を生じ、集中治療を要した一例を経験した。本症例はムカデ咬傷に対して未治療であった。適切な治療を行わなかった場合、2次感染で重症化することがある。特に頸部では主要臓器と隣接しているため創部の観察、処置は重要である。

14. **診断に難渋したビタミンB<sub>12</sub>欠乏による血栓性微小血管障害の一例**  
判治 永律香 (大森研修医)  
86歳女性。意識障害で搬送され血栓性血小板減少性紫斑病の診断で直ちに血漿交換を施行したが改善せず、精査の末、ビタミンB<sub>12</sub>欠乏による血栓性微小血管障害の診断に至った。急性期診療では直感的診断が重要となる一方、診断困難例では先入観を捨て、多様な鑑別診断を念頭においた分析的考察が重要となる。希少かつ治療可能で致命的な病態であり、診断学的考察を交えて報告する。

15. **治療反応に乏しい髄膜炎に対して、培養結果判明前に治療介入した結核性髄膜炎の 1 例**  
森 岳雄 (大森研修医)  
42 歳のインド国籍男性。数週間前からの発熱および意識障害で来院した。抗菌薬や抗ウイルス薬を用いたが急激に意識障害が進行した。培養結果判明前に結核性髄膜炎と推定診断し、4 剤での加療を開始した。後に髄液中 ADA 高値, Tb-IGRA 陽性となったが、培養および PCR は陰性であった。結核性髄膜炎は培養検査の感度も低く、検査特性等の文献的考察を交えて報告する。

#### G. プロジェクト研究報告 2 (No.16-18)

16. ***Helicobacter pylori* (*H. pylori*)による十二指腸細菌叢の変化と代謝産物への影響**  
前田 正 (大森総診)  
(*H. pylori*) 感染は胃外疾患の発症にも関与する可能性が考えられているが、その因果関係には不明な点も多い。その要因の一つに、微生物細菌叢により生成される代謝産物の影響が示唆されている。*H. pylori* が腸内細菌叢を変化させ、宿主の生物学的機能に影響を与えるかどうかを検討したところ、*H. pylori* の存在は、十二指腸細菌叢のバランスを崩し、管腔内微生物代謝を変化させ、いくつかの病原微生物の割合を高める可能性があることが確認された。

17. シェーグレン症候群発症における IL-33 の役割の解析  
井上 彰子 (大森耳鼻)  
血球系細胞特異的に、核内転写制御因子 SATB1 の発現を欠損するマウス (SATB1 cKO) は、生後早期から、シェーグレン症候群 (SS) 様病態を呈する。本研究では、SS 発症後のサイトカイン産生プロファイルを検討した。涙液中のサイトカインについては、12 週齢の SATB1 cKO マウスで、IL-1a と TNF-a の増加が認められた。その他のサイトカイン産生についても、考察を加え報告する。

18. **関節リウマチにおける単球系細胞に対するフラクタルカインの関与の解明**  
村岡 成 (大森膠原)  
関節リウマチ (RA) の病態に関与している単球系細胞に対するフラクタルカイン (FKN) の役割について多角的に検討した。健常者末梢血由来の CD14 陽性単球を単離し、次に CD16 陽性単球と陰性単球に単離した。FKN は CD14 陽性単球における IL-1 $\beta$ 、IL-6 産生に影響しなかった。FKN は CD16 陰性単球の破骨細胞分化を形態的かつ機能的に促進した。さらに、CD16 陰性単球由来樹状細胞からの破骨細胞分化も促進した。FKN が RA の病態に寄与していることが示唆された。

#### H. プロジェクト研究報告 3 (No.19)

19. **気管支鏡検査における術者による患者苦痛度予測の妥当性の検討**  
三好 嗣臣 (大森呼内)  
2018 年 12 月から 2019 年 4 月に気管支鏡検査を受けた患者に対し VAS を用いて苦痛度評価を行った。同様に術者には検査終了後に、検査中の患者の様子から患者の苦痛度を予測してもらった。最終的に患者と術者間の評価を比較し、乖離を検討した。結果、鎮静薬の種類によって患者の苦痛度評価と術者評価に差がみられ、ミダゾラムの併用によって患者苦痛度の軽減が認められた (3.4 vs. 2.5;  $p < 0.001$ )。

#### J. 一般演題 1 (No.21-24)

21. **当院における国際医療支援の現状：外国人患者対応職員へのアンケート結果から**  
大岩 彩乃 (国際支援部・大森麻酔)  
国際医療支援部では 2019 年度の 1 か月間に外国人患者対応を行なった職員に対しアンケートを施行した。119 名から回答を得た。対応で困ったことがあると回答した割合は 79.0%と高く、内容として、意思疎通、治療内容説明、病歴把握が多かった。通訳サービスでは通訳者、翻訳機の使用頻度が多く、対応言語は中国語、英語の順が多かった。55%の回答者が何らかし誤通訳や誤翻訳を経験しており、今後の大きな課題と考えられた。

22. **結節性紅斑を伴った溶連菌感染後反応性関節炎を発症した高齢女性の一例**  
 竹内 泰三 (大森総診)  
 高血圧、高脂血症既往の 71 歳女性。来院 2 週間前に咽頭痛と発熱、来院 1 週間前より両膝、両肘の発赤及び疼痛を自覚し、近位総合病院を受診した。抗菌薬投与で改善ないため当院に転院となった。来院時、四肢大関節に腫脹と発赤と疼痛を認め、下腿に結節性紅斑を認めた。血液検査で炎症反応上昇、血清 ASO 異常高値であり病歴と合わせて結節性紅斑を伴う溶連菌感染後反応性関節炎と診断した。
23. **問診により診断にたどりついた胆管拡張の 1 例**  
 菊地 秀昌 (佐倉消内)  
 50 歳代男性、胃痛のため近医で腹部エコーしたところ肝内胆管拡張を指摘も肝胆道系酵素に異常なく紹介受診された。CT および MRCP 施行したが胆管腫瘍はなく胆管拡張を認めた。ERC にて胆管内に口径不整な部位や不整形透亮像が散見された。詳細な病歴聴取にて、以前は中国で漁師をしていたことが判明、当時の川魚の生食歴から肝吸虫を疑い、胆汁細胞診から診断確定した。肝吸虫は稀であり、若干の文献的考察を加え発表する。
24. **LC/ESI-MS/MS による生体試料中化合物定量法の最適化**  
 岡 真悠子 (化学)  
 液体クロマトグラフィー質量分析は、微量の化合物でも感度良く定量可能な分析法である。本分析法の生体試料への応用例は広く、その前処理も含めプロトコルが確立されているものも多い。今回、一例につき使用装置への適用を試みたが、測定の成功には移動相の pH や目的化合物の極性を踏まえた化学的な考察が必要とされた。その解決法に関して定量手順の紹介も含めて報告する。
- K. 一般演題 2 (No.25)**
25. **ハイブリッド手術室における術中顔面骨 CT 評価の有用性**  
 花田 隼登 (大森形成)  
 ハイブリッド手術室新設に伴い、顔面骨骨折整復手術に対し術中 CT 評価を開始した。2018 年 6 月以降施行した症例は 10 例で、内訳は多発骨折 4 例、頬骨骨折 3 例、鼻骨骨折 2 例、下顎骨骨折 1 例であった。そのうち整復不十分と評価し、再整復を施行した症例は 3 例であった。多列検出器型 CT 装置よりも被ばく線量は少なく、顔面骨骨折手術、特に複雑な骨折例において有用と思われた。
- L. 大学院生研究発表 2 (No.26-27)**
26. **日本人 2 型糖尿病患者における心血管リスク因子回避に対するダパグリフロジンとシタグリブチンの比較検討**  
 瀧上 彩子 (代謝機能制御系)  
 日本人 2 型糖尿病患者 340 人に対して、ダパグリフロジンまたはシタグリブチンを 24 週間投与した。主要評価項目は、HbA1c 7.0%未満、体重 3.0%以上の減量、低血糖の回避の複合エンドポイントの達成率であり、ダパグリフロジンがシタグリブチンより有意に達成していた。その他の心血管リスク因子についても比較検討した結果、心血管リスク因子を回避する血糖管理においてダパグリフロジンがシタグリブチンと比べ有効であると考えられた。
27. **家兎を用いた全身循環動態に対する眼底循環評価の確立**  
 小松 哲也 (大森眼科)  
 現在は機器の発達により、眼循環測定では詳細な情報が得られる様になった。しかし、全身循環が眼循環に及ぼす影響については未だ十分に解明されていない。我々は、全身麻酔下の白色家兎を用いた眼 - 全身循環の同時測定系を確立を目的とし、まずは血圧変動による変化を観察するためにアドレナリンを全身投与した。眼血流指標の MBR は薬剤投与中に網膜血管と脈絡膜の各領域で用量依存的に上昇し、血圧とも強く相関した。

2月14日(金)

M. 研修医発表 3 (No.28-29)

28. **症状の切迫を認めた双極性障害 II 型に電気けいれん療法を施行し、治療が奏功したと考えられる一例**  
水野 裕仁 (大森研修医)  
電気けいれん療法は迅速な症状改善を期待できる治療法の一つである。今回、薬剤加療中に症状の切迫した双極性障害 II 型に同治療を施行し、食事の摂取量や自覚症状を通じて経過を評価した。電気けいれん療法施行後、5割未満だった摂食量は10割に向上し、また疎通性の改善や発話量の増加を認め、笑顔も見られるようになった。明るくなったという自覚も出現し、外泊も問題なく行えた。

29. **OHSS(ovarian hyperstimulation syndrome) について**  
松岡 修平 (大森研修医)  
卵巣過剰刺激症候群(ovarian hyperstimulation syndrome) は排卵誘発剤の投与に伴い発生する医原性疾患であり、卵巣腫大、腹水および胸水の貯留、血液濃縮などを呈し、血栓塞栓症や多臓器不全等重篤な合併症に至る可能性もある。OHSS の発生率低下にはリスクファクターを考慮した予防策が寄与するため、適切な予防策を講じることが重要であると言われている。今回不妊治療中に OHSS を発症した症例をもとに疫学と重症度、治療法、予防法に関して考察したので報告する

N. プロジェクト研究報告 4 (No.30-31)

30. **腹側海馬台における情動記憶形成機構の神経基盤研究**  
石原 義久 (生体)  
PCP4 等の染色性によって区分される海馬台近位部 (Sub2) が情動記憶の神経基盤であるという仮説を形態学的に検証した。Sub2 には情動に関連する中隔核へ投射するニューロンが分布し、Sub2 は背側になるにつれ縮小し、背側端では観察できなくなった。この事実は、腹側海馬台の破壊が情動記憶力の低下を招く現象と一致している。観察するレベルや切片作製法の違いにより、海馬台の領域数が変わることも併せて報告する。

31. **生体環境下で形成される緑膿菌バイオフィルムの構造と性質の 3 次元解析**  
濱田 将風 (微病)  
バイオフィルム感染症は治療抵抗性を示すことから、バイオフィルムを標的とした治療戦略が求められている。今回、緑膿菌 *Pseudomonas aeruginosa* のバイオフィルム形成に対する宿主因子 (血漿) の影響を検討した。その結果、*P. aeruginosa* のバイオフィルム形成量が血漿濃度依存的に増加することが観察された。

O. プロジェクト研究報告 5 (No.32-34)

32. **甘草の抗不整脈作用および催不整脈作用の定量的評価**  
千葉 浩輝 (薬理/東洋)  
甘草の心臓安全性評価に関する報告はない。臨床用量 (6 g/日) の 2 倍 (低用量、n=4) および 6 倍 (高用量、n=5) 相当の甘草湯エキスを、それぞれ経胃管を用いて慢性房室ブロック犬に 3 日間投与し、3 日目のみホルター心電図を 24 時間記録した。低用量は QTcF を投与 6 時間後に延長した。一方、高用量投与 2 日目に 1 例が死亡し、投与 3 日目に 1 例が心室自動能抑制に起因する急性心不全を発症し、心室細動で死亡した。

33. **胆汁酸取り込みによる白血病細胞の悪性度評価と胆汁酸トランスポーター阻害薬による新たな抗腫瘍薬開発のための基盤研究**  
羽賀 洋一 (大森小児)  
小児血液悪性疾患の治療経過中において、骨髄回復期に一過性の総胆汁酸値の上昇を認める現象から、血球増殖時に胆汁酸が利用される仮説を立てた。更に白血病初発時には末梢血に比して骨髄中の総胆汁酸値が低下しており、白血病細胞も増殖に胆汁酸を利用するという仮説を立てた。今回、白血病細胞に対し蛍光胆汁酸 (FTUDCA) を取り込ませる実験を行い、胆汁酸取り込みを確認した。

34. **脂質-Ca<sup>2+</sup>シグナル関連機構を介した膵臓β細胞のインスリン分泌制御**  
大島 大輔 (統合)  
2型糖尿病の病態は、末梢組織のインスリン抵抗性の獲得と膵臓のインスリン分泌不全により形成される。膵臓β細胞のインスリン分泌分子機構として、血糖の上昇に伴った電位依存性L型Ca<sup>2+</sup>チャンネルを介する細胞内へのCa<sup>2+</sup>流入が必須である。これまで膵臓β細胞由来培養細胞株を用いた実験で、脂肪酸添加によるインスリン分泌の低下を見出した。現在、インスリン分泌におけるCa<sup>2+</sup>シグナルと脂肪酸との関連について解析を行っている。

#### P. 分科会報告 1 (No.35)

35. **IVRカンファレンス「治療に苦慮した High flow AVM の一例」**  
原田 雅史 (大森脳外)  
今回われわれは治療難渋した high flow AVM の一例を経験したので報告する。症例は、61歳男性。頭部MRIでSpetzler-Martin grade II (S-M)のAVMを認め、脳血管撮影では右MCAおよび右ICAからのhigh flow feederを認めた。Normal perfusion pressure breakthrough (NPPB)を生じる危険性が高いと判断し、AVM摘出前にFlow reduction目的で栄養血管塞栓術を行ったが、AVM摘出術後にNPPBを生じ、脳出血および脳腫脹をきたした。S-M grade IIであってもhigh flow AVMである場合、術後にNPPBを生じるリスクが非常に高く、術後の重篤な合併症を生じることがあるため、外科的治療の適応に関して慎重に検討を行う必要があると考えた。

#### Q. 分科会報告 2 (No.36-37)

36. **東邦小児医療研究会「肺動脈性肺高血圧症患者における呼吸機能」**  
早乙女 壮彦 (大森小児)  
肺動脈性肺高血圧(PAH)患者は拘束性障害を示す報告があるが、肺高血圧発作時に閉塞性障害を疑わせる病態を経験する。血行動態の安定したPAH患者10名の肺機能を評価し血行動態との相関について検討することを目的とした。正常肺機能を示した9名でも末梢気道パラメータは低値で、MostGraphのR5は高値だった。血行動態と呼吸機能各パラメータに相関は認めなかった。PAH患者では潜在的に閉塞性の病態となっている可能性が考えられた。

37. **第12回佐倉病院学術集会**  
**「ステロイド合成酵素阻害薬による内服加療を行ったACTH依存性クッシング症候群の一例」**  
高橋 禎 (佐倉研修医, 佐倉糖内)  
86歳男性。慢性心不全の加療中に両側下腿浮腫と低K血症が出現し、異所性ACTH依存性クッシング症候群とした。原発不明であったが副腎質ホルモン合成酵素阻害薬を投与し原疾患をコントロールでき考察を交えて報告する。